

旧九州帝国大学(現国立大学法人九州大学箱崎サテライト)近代建造物群について

1 敷地の位置および沿革

当該建造物群は、福岡市東区箱崎地区にある九州大学旧箱崎キャンパス跡地に存在している。

この地域は古代末～近世に形成された箱崎遺跡群が分布し、鎌倉時代には元寇防塁が築造されるなど、古くから要所として扱われた。中世以降は唐津街道における宿場町として栄え、近隣に位置する筥崎宮についても、その本殿、拝殿、鳥居、楼門が国指定重要文化財に指定されており、その門前町としても歴史がある。もとは、現在の国道3号線の辺りに海岸線があり、松林が点在する風光明媚な土地であったが、近代に入って箱崎キャンパス跡地は良好な畑地として利用されていた。そこに現在の九州大学の前身が設立されたことで、学問のまちとしての特色も濃いものとなった。

2 大学の沿革および建造物の歴史

九州大学の歴史は、古くは江戸時代の福岡藩の医学校である賛生館、県立福岡医学校などまで遡る。熊本県や長崎県との誘致合戦の結果、1903(明治36)年に京都帝国大学福岡医科大学が現在の福岡市東区馬出地区に創立されたことに始まり、そのルーツは医科にあった。文部省が1907(明治40)年度予算に計上した工科大学の創立費用に加え、旧財閥の古河家、福岡県及び福岡市による寄付により、箱崎町字地藏松原に1911(明治44)年に工科大学が整備された。これにより国内4番目の帝国大学として九州帝国大学が創立する。大学設置の背景として、日露戦争以降に産業的な重要性が高まってきたこと、及び義務教育の年限延長と併せて高等教育機関の増設が必要不可欠であったことなどが挙げられる。

1916(大正5)年から1925(大正14)年にかけては、大正天皇をはじめとした皇室の来学が5回におよんだ。当時、天皇の大学への行幸は東京帝国大学以外に先例のないものであり、天皇の行幸や皇族の行啓は大学が最も光栄とすることであった。これらの皇室は、1911(明治44)年に完成した工科大学本館内にある便殿などを利用した。この工科大学本館は現存していないが、のちに建設される工学部本館に、貴賓室として便殿の機能が受け継がれている。また、1913(大正2)年には中国革命の父と呼ばれる孫文が来学し各学部を参観、1922(大正11)年には物理学者のアインシュタインが来学。この時にアインシュタインと大学関係者が撮影された写真が残されている。

なお、前言の工科大学は、1911(明治44)年に完成を目前にして火災によりその一棟(第一分館)が全焼している。また、1923(大正12)年には煉瓦造の本館が火災を起こし全焼した。奇しくも同年に発生した関東大震災及びこの二度の火災の教訓から、以降の建造物は耐震耐火の鉄筋コンクリート造とし、火気を使用する実験室を別館とすることが学内より強く希望された。

本館の再建までに使用する場所として、1925(大正14)年に仮実験室及び研究室、第一仮実験室が建設された。これら2棟はのちに大学本部として使用される予定であったため、仮設ではなく煉瓦造の建築となっている。これがのちの九州帝国大学本部事務棟、本部建築課棟となった。

その後1925(大正14)年の法文学部設置に伴い、キャンパス用地が拡大され正門及び門衛所が現在の場所に曳家された。この頃に大学内の大型建築物群が集中的に建設され、その設計の多くを当時の九州帝国大学建築課長であった倉田謙が手掛けている。なお、のちに倉田が設計した工学部本館は、彼が洋行調査を経て学んだ建築様式が取り入れられている。1930(昭和5)年に工学部本館が完成した同年、本部機能が前出の仮実験室及び研究室、第一仮実験室に集約された。九州帝国

大学開設以来、医学部（福岡市東区馬出地区）にあった大学本部が、これを機に箱崎地区へと移管されたことになる。その後1941(昭和16)年頃にはキャンパス内の建造物は大小併せ100棟以上に上った。

太平洋戦争終戦間際の1945(昭和20)年には、学内の木造以外の建造物の多くが空襲を避けるため迷彩色や黒色に塗られた。幸いにも箱崎地区の建造物に損傷はなかった。その後1949(昭和24)年の国立学校設置法により、新制九州大学が発足した。1950年代(昭和20年代後半)に入ると新学科開設など各学部の拡充がなされ、キャンパス内に新たな校舎が建設されていった。

1968(昭和43)年、キャンパス内に建設中の大型計算機センターへの米軍機墜落事故をきっかけに九州大学でも大学紛争が巻き起こり、それと同時に航空機離着陸路の直下にある箱崎からのキャンパス移転を望む声も強くなった。激化した学生運動により複数の建造物が損壊の憂き目に遭ったが、幸いにも工学部本館4階会議室は調度品を含めその被害を免れている。

移転にまつわる模索は1970年代(昭和40年代後半)からおよそ20年に及んだ。上空を通る航空機の騒音等に加えて、キャンパスの狭隘化、教養部（福岡市中央区六本松地区）と各学部、大学院（箱崎地区）との分散により一体的な研究・教育に支障が出ていることが主な理由であった。1991(平成3)年に福岡市西区元岡地区（現在の九州大学伊都キャンパス）への統合移転が決定されると、2005(平成17)年の工学系部局を皮切りに、2018(平成30)年までに箱崎から伊都キャンパスへの移転を終えた。

また、2003(平成15)年に九州芸術工科大学（大橋地区）との統合、2004(平成16)年には国立大学法人法により国立大学法人九州大学となるなど、大きな変革を迎えた。2011(平成23)年に創立100周年を迎えた九州大学は、箱崎の地で約16万7千人の学生を輩出した。

2012(平成24)年、箱崎地区の大小200棟余りの建造物のうち24棟について、大学内でワーキンググループを立ち上げ建築学的価値や老朽化の状態に関する調査を行った。その結果に基づき、九州大学の歴史を象徴し歴史的にも特に価値があると評価したものが「工学部本館」「本部事務室棟」「本部建築課棟」「門衛所」「正門」の5つである。大学の将来計画委員会は、2021(令和3)年にこれらが残るゾーンを「九州大学箱崎サテライト」と称し、保存活用を前提に近代建築物にふさわしい機能を導入する取り組みを行うことを提言した。「正門」については門柱耐震補強工事を2023(令和5)年に実施した。なお、この5つ以外は2018(平成30)年以降、2021(令和3)年までに全て解体されている。

登録建物一覧

	名称	構造形式	大きさ	建築年代	基準	文化財登録年月日
1	きゅうきゅうしゅうていこくだいがくがくぶほんかん 旧九州帝国大学工学部本館	鉄筋コンクリート造 一部鉄骨鉄筋コンクリート造 3階地下1階建 塔屋付	3,152㎡	昭和5年完成 昭和63年大規模改修	2	令和5年2月
2	きゅうきゅうしゅうていこくだいがくほんぶじむしつどう 旧九州帝国大学本部事務室棟	煉瓦造 2階建 塔屋付	1,276㎡	大正14年完成 昭和38年増築	2	令和5年2月
3	きゅうきゅうしゅうていこくだいがくほんぶけんちくかどう 旧九州帝国大学本部建築課棟	煉瓦造 2階地下1階建 塔屋付	230㎡	大正14年完成 昭和48年改修	2	令和5年2月
4	きゅうきゅうしゅうていこくだいがくもんえいじょ 旧九州帝国大学門衛所	煉瓦造 1階建 スレート葺	29㎡	大正3年完成 大正13年曳家 昭和33年改修	2	令和5年2月
5	きゅうきゅうしゅうていこくだいがくせいもんおびへい 旧九州帝国正門及び塀	門柱：煉瓦造 塀：コンクリートブロック造 及び煉瓦造	41m	大正3年完成 大正13年曳家 令和5年改修	1	令和6年7月 (予定)

※「大きさ」は建築面積のうち、登録される部分の面積もしくは長さを示す

3 旧九州帝国大学工学部本館について

【概要】

当該建築は正門に近い立地にあり、箱崎地区における九州大学の代表的建築物である。

1914(大正3)年3月に建設された工科大学本館が1923(大正12)年12月に火災で焼失したため、九州帝国大学工学部の教官室、講義室、研究室、標本室等が入る建物として新たに建設された。

設計者は九州帝国大学の建築課長であった倉田謙、設計技師の小原節三、施工者は清水組(現清水建設株式会社)。当時の契約書によると総工費は約89万円(当時価格)であった。

2007(平成19)年に工学系部門が移転したのちは、大学総合博物館と大学文書館等が入居した。

【建設及び主な改修】

昭和前期の1928(昭和3)年11月起工、1930(昭和5)年11月落成。1985(昭和60)年から1988(昭和63)年にかけては3期に渡り大規模改修工事が行われた。

【特徴】

鉄筋コンクリート造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造(大講義室、第一会議室)。地上3階、地下1階、塔屋付。コンクリートスラブ陸屋根。外壁タイル仕上げ。建設当時は福岡市内で最も高い建造物と紹介された。外観は量塊性のあるシンボリックな意匠。内部諸室の見所は、塔屋部の会議室と1～2階に巨大な空間を占める大講義室である。また、建設当時急速に普及していたエレベーターが採用され、キャンパス内には暖房用暗渠が張り巡らされるなど、設備の面でも様々な試みが見られた。

【評価】

関東大震災後に耐震構造の主流となった鉄骨鉄筋コンクリート造の建造物としては初期の例であり、わが国の耐震構造の歴史の上でも貴重な遺構といえる。軸線を共有する本部事務室棟と一体となって大学の景観を形成し、ランドマーク的な役割を果たすと同時に、戦前の帝国大学における個別の建築物としてだけでなく、帝国大学キャンパスの景観を保存する点で極めて重要な価値を有している。受験雑誌の表紙等に紹介されるなど、現在では再現が難しいスクラッチタイルによるアールデコ調の柔らかなカーブは大学のシンボルとして親しまれ、多くの研究者を育てた歴史的意義とともに地域のシンボルにふさわしい。この量塊性に満ちたリズムミカルな造形は、威風堂々とした存在感だけでなく、人々に親しまれる独特の落ち着きをもつ名建築といえる。

また、地下の窓サッシなど建設当時のものが随所に残されていることも史料として価値が高い。とくに、会議室については建築物とデザインを併せて設計・発注した家具類や絵画の優れた美術的価値もさることながら、昭和天皇来学のための玉座として設営されたという背景と合わせる、当時の関係者、設計者のデザインに対する並々ならぬ意気込みを感じさせる。

建造物だけでなく設計図面、仕様書、入札記録や写真などの当時資料が多く保存されており、年表や年史などにまとめられていることも評価に値する。建設中の鉄骨の組み立ての様子が写真に残されており、付属する貴重な記録として評価できる。改修の記録からは、女子学生の増加や大学紛争の激化など様々な時代背景も読み取ることができ、まさに福岡、あるいは九州、さらに日本の近代化の歴史を物語る建造物である。

4 旧九州帝国大学本部事務室棟について

【概要】

当該建造物は、工学部本館と互いの正面玄関を軸に向かい合う。長らく九州大学の本部が置かれたシンボリックな建造物である。設計者は九州帝国大学の建築課長である倉田謙、施工者は佐伯工務所（現株式会社佐伯建設）であった。

1923(大正 12)年 12 月に火災で焼失した工科大学本館に代わり現在の工学部本館を再建するにあたって、その完成までの間に教官室、実験室、研究室として使用された。他の仮教室が仮設もしくは医学部の旧病棟を移築した簡易的なものであったのに対し、こちらの建造物及び隣接する第一仮実験室（のちの本部建築課棟）の 2 棟は当初より大学本部として使用される予定であったため、永続的に使用可能な煉瓦造となった。復旧調査の結果、旧工科大学本館の外装に用いられた煉瓦や礎石等の石材の再利用が可能であると判明したこと、旧工科大学本館の寄贈者である古河財閥の 3 代目当主であり古河鋳業社長であった古河虎之助より、セメント 5000 樽及び銅版台 1400 貫匁(5250kg)の寄付を受けたことが後押しとなり、建設が決まった。なお、玄関には古河の寄付行為を表彰した銅製の銘板が掲げられている。工学部本館が完成した 1930(昭和 5)年以降は、2014(平成 26)年 4 月に本部機能が移転するまで一貫して大学本部として使用され、総長室や貴賓室などが置かれていた。

【建設及び主な改修】

大正後期の 1924(大正 13)年着工、1925(大正 14)年 3 月落成。1963(昭和 38)年 1 階東側にコンクリートブロック造にて便所増築。

【特徴】

煉瓦造。地上 2 階建。コンクリートスラブ陸屋根、塔屋は方形横葺き銅板張。建設が関東大震災直後であった影響か、床・梁には鉄筋コンクリートを使用している。煉瓦造の様式性と装飾性をよくとどめており、プロポーションが美しい。一階と二階の窓の形態を異にして変化があり、玄関上部のルネット窓の意匠が印象的である。外壁煉瓦は小口積で仕上げられているが、東側（裏面）のみイギリス積となっており、人目につきにくい部分は廃材の少ない合理的な仕上になったものと推察できる。

【評価】

工学部本館に対面する箱崎キャンパスの中心的存在であり、工学部本館に先立つ大正後期の煉瓦造による伝統的な造形は九州帝国大学を代表する建物といえる。車寄せを中心に左右に翼部を広げる構成は、工学部本館とシンクロするだけでなく、それと軸をなす配置から、工学部本館と対になってシンボルとして機能している。古河財閥の寄付によって建設が実現したことからも、地域が一体となって実現した建物であったといえる。

設計図面や写真などの当時史料が多く現存しており、年表や年史などにまとめられていることに加え、歴史的経過を銘板などで記している点も当時の大学人、卒業生から愛された建物であることがうかがえる。長く大学本部として使用されてきたことから、大学全体の歴史を最も象徴していると言って相違ない。また、大学紛争の際は学生の立てこもりにより特別応接室の内装に損傷を受けたが、その改修の歴史も大学そのものの歩みを刻んでいるといえよう。数少ない煉瓦造の建造物であるだけでなく、小口積みなどの繊細な造形も規範となっており、再現が難しい細部の装飾と併せて評価できる点の多い建造物である。

5 旧九州帝国大学本部建築課棟について

【概要】

当該建造物は正門に近い立地で、隣接する本部事務室棟とは兄弟建築の関係にある。設計者は九州帝国大学の建築課長である倉田謙、施工者は佐伯工務所（現株式会社佐伯建設）。

1923(大正 12)年 12 月に火災で焼失した工科大学本館に代わり現在の工学部本館を再建するにあたって、その完成までの間に実験室として使用された。永続的に使用可能な煉瓦造となったこと、古河財閥の寄付が後押しとなり建設が決まったことは本部事務室棟と同じである。

工学部本館が完成した 1930(昭和 5)年以降は、2014(平成 26)年 4 月に本部機能が移転するまで概ね建築課（のちの施設課、施設部）を中心に大学本部として使用された。工学部本館完成後、2004(平成 16)年の国立大学法人化までは、1 階に教育施設局福岡出張所（のちの管理局教育施設部福岡工事事務所、文部省福岡地方工事事務所）も入居していた。

【建設及び主な改修】

大正後期の 1924(大正 13)年着工、1925(大正 14)年 3 月落成。

【特徴】

煉瓦造。地上 2 階地下 1 階建。コンクリートスラブ陸屋根。床・梁に鉄筋コンクリートを使用。本部事務室棟と横並びの立地で、西側に玄関を配した左右対称の建物。前者と比較して規模が小さく外装内装ともに控えめであるが、その姿形は美しくまとまっている。建物全体がイギリス積の赤い煉瓦に覆われ、上下に人造石の白いバンドと胴蛇腹を備え、1 階と 2 階を区切る花崗岩のコーニスが整然とした印象を与える。その煉瓦の目地は揃っており高い施工技術が窺える。

半地下を有するため玄関が 6 段の石造の階段を上る高い位置にあり、車寄せは備えていない。中央の塔屋頂部は焼失した工科大学本館の正面に存在したペディメントの意匠を引継いでおり、部材そのものを転用したと推測される。この塔屋を中心に装飾性の高い石材を使用しており、2 階中央正面窓には意匠性のある花崗岩の窓台が取り付けられている。各窓のキーストーン、両隅を曲面状に仕上げた窓台などにも、旧工科大学本館の窓で使用されていた意匠が見て取れる。階段室の吹き抜け空間、及び地下室については、当初のデザインが比較的残されている。地下室の窓サッシの一部については、当初のものである。建設コストを抑えつつ、美しくまとめた良い例だと言える。

【評価】

箱崎キャンパス内の中心軸を成す工学部本館と本部事務室棟の完結した一体感に対して、小振りで瀟洒な本部建築課棟は、一種のアクセントを与える存在になっており、戦前の大学キャンパス景観の形成過程を物語る大切な要素となっている。階段室のルネット窓など、本部事務室棟をコンパクトにしたといえる構成は、同じく工科大学本館の部材を転用して建設された本部事務室棟とともに、かつての工科大学本館の面影を残しつつ、大学キャンパスの段階的な整備の実情を伝え、それまでの大学の歴史を語るにふさわしい建築物である。大正後期の建設であることを考えると、本部事務室棟とともに煉瓦造最後期の建築物としても重要である。他の 3 件と同様に当時資料が残されていることに加え、改装のうえ事務施設として現役で使用されているところも評価対象といえよう。

6 旧九州帝国大学門衛所について

【概要】

当該建造物は正門の真横に位置し、建設当時から一貫して正門の門衛所として使用され続けている。設計者は九州帝国大学の建築課長である倉田謙、施工者は鴻池組。旧箱崎キャンパスに現存する最古の建造物である。元々は現在の位置よりやや西側、キャンパス内側に玄関を東向きにして建設された。その後、キャンパス用地が南へ拡大され、正門の位置やその向きが変更となったことに伴い、1924(大正 13)年に曳家で玄関を南向きにして移築された。

【建設及び主な改修】

大正前期の 1913(大正 2)年 11 月着工、1914(大正 3)年 1 月完成。同時に木造平屋建の便所も併設された。1924(大正 13)年 2 月、曳家によって現在地へ移設。曳家後当初は便所が玄関向かって左手に存在した。その後、1958(昭和 33)年に浜松建設の手で倉庫が便所(鉄骨造 2.6 m²一部コンクリートブロック積モルタル塗装仕上)へと改修され、便所が正面から見えない位置に設けられた。

【特徴】

煉瓦造 1 階建。屋根はスレート葺で、寄棟の複合型、正面のみを切妻としている。煉瓦は小口積を基調とし、基礎は花崗岩、笠木は人造石。窓にはセグメンタルアーチが連続して多く用いられ、意匠にはアールヌーボーの名残が留められている。これは、福岡市赤煉瓦文化館(旧日本生命保険株式会社九州支店)の基層の窓によく似ており、その時代の煉瓦建築を象徴しているといえる。内観について、壁はモルタル上に塗装、天井は板張りに塗装と控えめな仕上である。床は更衣室が板張り、他はモルタル仕上。

【評価】

小規模ながら、煉瓦造建築としてまとまりのある上質の佳品である。屋根の棟飾りや空気抜きなど歴史的意匠が高密度に集約され、石材の使い方には明治時代の意匠の継承も見られる。正門脇という立地からも、小規模ながら長年にわたり地域のシンボルとして記憶に留まっており、正門とともに日常性のある地域景観資産である。本部事務室棟、本部建築課棟との意匠上の共通点が多く見受けられ、建設年代の最も古い本建物は九州帝国大学のキャンパス建物の原点、あるいは出発点ともいえる建造物である。

7 旧九州帝国大学正門及び塀について

【概要】

当該建造物は門衛所の真横に位置し、正門および境界塀の一部としての機能を有している。施工者は、鴻池組である。設計者は、正確な記録はないが、九州帝国大学の建築課長である倉田謙が、同一工事内で建設された門衛所の設計者であったことから、当該建造物についても倉田謙が設計した可能性が高い。元々キャンパスの正門は、現在の位置よりやや北西側にあったが、法文学部本館（のちの旧応力研生産研本館）建設のためキャンパス用地が西へ拡大された際に正門の位置が変更され、門衛所と併せて移築されている。以降、同じ場所で一貫して正門として使用され続けている。

【建設及び主な改修】

建設年は、門衛所と同様、大正前期の1913(大正2)年11月着工、1914(大正3)年1月完成。1924(大正13)年に門衛所と同時に現在地に移築された。移築に際し門衛所の東側壁面とつながる塀が増設された。また、2023(令和5)年に耐震補強工事を実施している。耐震補強方法は、基礎の拡幅及びアラミド繊維ロッドを用いた心棒を設ける補強工法が採用されている。なお耐震補強工事の施工者は、建設時と同じ鴻池組である。

門扉及び柵は当初、メタルワークで装飾的なものであったが、老朽改善も含めて幾度か取り替えられている。現在の柵は、耐震補強工事に併せて、鉄柵からアルミニウム製鋳物柵へと取替えたものであり、門扉は運用上の理由から設置されていない。門柱の頂上には、青銅製の金具と球形のガラスによる照明器具が設置されていたが、金属の腐食やガラスの破損等により近年撤去され、耐震補強工事の際に当時の照明器具を再現したレプリカが設置された。

【特徴】

当該建造物は、赤煉瓦と石造の組み合わせである門柱・脇柱・柵柱及び上部に柵を有する組積造の境界塀とで構成されている。赤煉瓦の門柱は、白御影石の礎石上に立ち、同じく白御影石の笠木を頂く。笠木下部には4面とも1対のフリース状の飾りが付き、その上にコーニス状に迫り出した刳形があって、平らな上面に四角い台座がある。頂上には、照明器具が据えられている。脇柱は、門柱を簡略したもので、フリース状の装飾も頂部の照明もない。門柱及び脇柱は、2本の白い御影石の帯で分節されている。控柱から境界塀へとつながる柵柱は、両側3本(計6本)が残存している。柵柱及び境界塀は、白御影石の礎石上にコンクリートブロックを組積し白御影石の笠木が設置された下部構造の上に赤煉瓦の柱、白御影石の笠木及び柵で構成されている。柵柱は、支柱及び控柱より高さも低く簡素な構成となっているが、その一つは、約120度に屈折した形状となっており、当時の技術力の高さが感じることができる。

【評価】

小規模ながら、箱崎キャンパスの象徴的な建造物である。九州帝国大学、九州大学と掛けられた看板を変えながらも大学正門として一貫した用途で用いられており、大学のシンボリック存在として風格がある。煉瓦造建造物としてのまとまりがあり、石材と赤煉瓦の組み合わせやドリス式の柱など古典主義の影響を大きく受けており、意匠的にも優れている。門衛所と併せて九州大学に残存する最古の建造物であり、門衛所や本部(第一庁舎、第三庁舎)との意匠上の共通点も多く、九州帝国大学の建造物の原点、あるいは出発点ともいえる。長年にわたり地域のシンボルとして記憶に留まっており、日常性のある地域景観資産である。大学のかつての“顔”として、また今後は箱崎キャンパス跡地の新たな街の玄関となるランドマークとして活用価値がある。

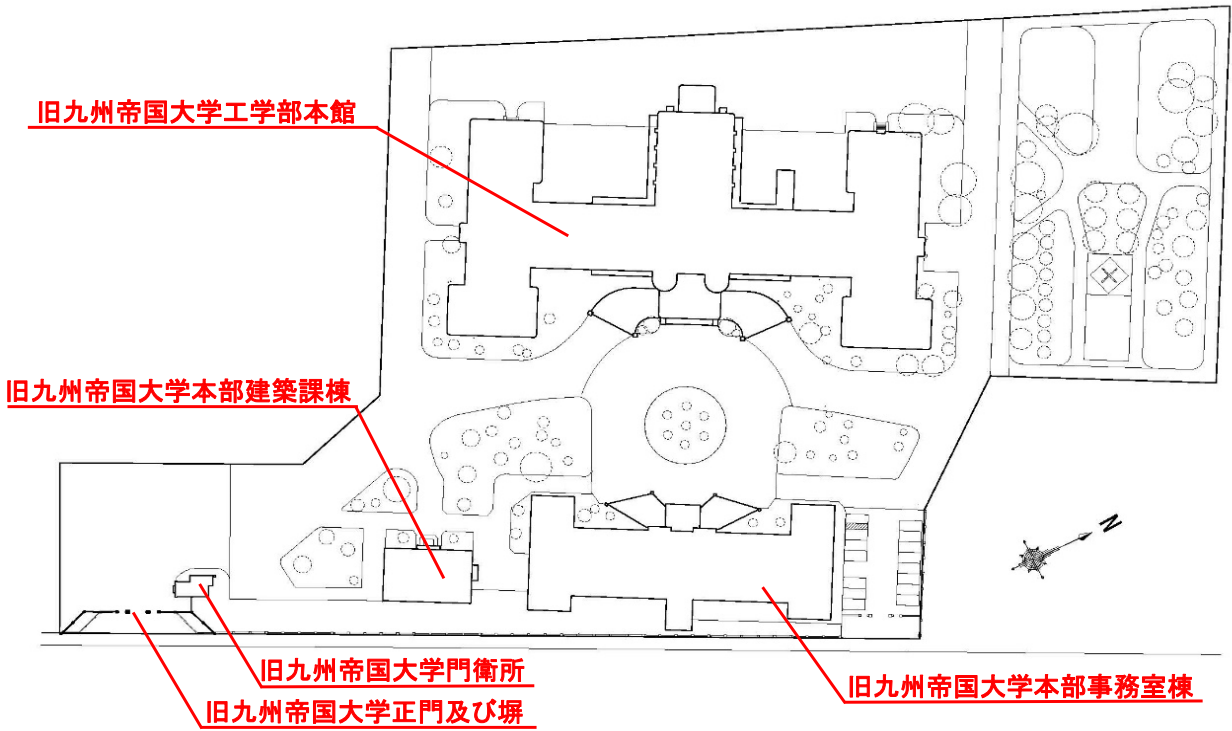
<登録有形文化財（建造物）について>

登録有形文化財制度は、国土開発や生活様式の変化などにより、文化財としての価値を評価されることなく消滅の危機に瀕している多くの歴史的建造物を後世に残していく目的で、平成8年に創設されました。重要なものを厳選し、許可制という強い規制で手厚く保護される従来の指定制度とは異なり、届出制と指導・助言等を基本とする緩やかな保護措置を講じるものです。また、事業展開や地域の活性化に積極的に利活用しながら、建物の魅力を国民にひろく知ってもらう制度です。登録有形文化財建造物とは、建築後50年を経過し、①国土の歴史的景観に寄与しているもの、②造形の規範となっているもの、③再現することが容易でないもののいずれかの基準を満たすものです。福岡市内には、今回登録される見込みの旧九州帝国大学正門を含めて、49件の国登録有形文化財（建造物）があります。

地理院地図



旧九州帝国大学近代建造物群 位置図



旧九州帝国大学近代建造物群配置図



工学部本館 正面外観（東）

東の正面玄関を軸とし、北と南にそれぞれ左右対称に翼部を延ばす構成となっている。

中央にそびえる展示塔、その両脇を固める半円筒状の塔屋、それよりやや低く水平に左右対称を守る研究室や事務諸室、翼部両端はT字形に突出する。展示塔の背後、西側に大講義室が控える。



工学部本館 正面外観（東）

軒には役物のテラコッタを鏝張りした蛇腹が周り、壁面はタイル張りとしている。タイルの形やその割付にも配慮し、その出隅や窓周りには役物を使用するなど技術の高さを示している。上部がテラコッタタイル、下部が当時流行したスクラッチタイル。



工学部本館 雨樋フード

ライオンを模した雨樋フードなど細部までデザイン性が高い。



工学部本館 正面玄関ポーチ

広い車寄せを持つ玄関ポーチは特に見所が多い。



工学部本館 正面玄関ポーチ天井部

庇を支える最前列の白い4本の円柱はその柱頭に丁寧な紋様を刻む。

庇の漆喰天井はレリーフで文節され、青銅の灯火と円形のステンドグラスが埋め込まれている。



工学部本館 正面玄関ポーチ両脇装飾

玄関ポーチ天井を両脇から支える持送りは、大きなコンドルを模した勇壮なデザインである。



工学部本館
正面玄関（内部より臨む）

玄関扉の幕板には彫刻が施され、欄間には植物をかたどったステンドグラスを飾る。



工学部本館
1F大講義室（演壇より臨む）

大講義室は緩やかな二次曲線を描いて約400席の聴講席が広がる。後方の四角い小窓の先は映写室。壁面の押え金物や飾り釘など細部にも意匠性がある。



工学部本館
1F大講義室（後方より臨む）

当時の意匠のままのアンティークな照明に包まれ、谷底に位置する堂々たる黒板に全ての視線が集中する。照明は当時の精巧なデザイン画が残されている。



工学部本館
4F会議室(南から北を臨む)

床は絨毯を敷き詰め、大阪三越の揃えた見事な椅子や机が並び、豪華なシャンデリアが室内を照らす。照明は後世に取替えられたもの。



工学部本館
4F会議室 梁型レリーフ

天井と梁下面是優美な浮き彫りを飾る。



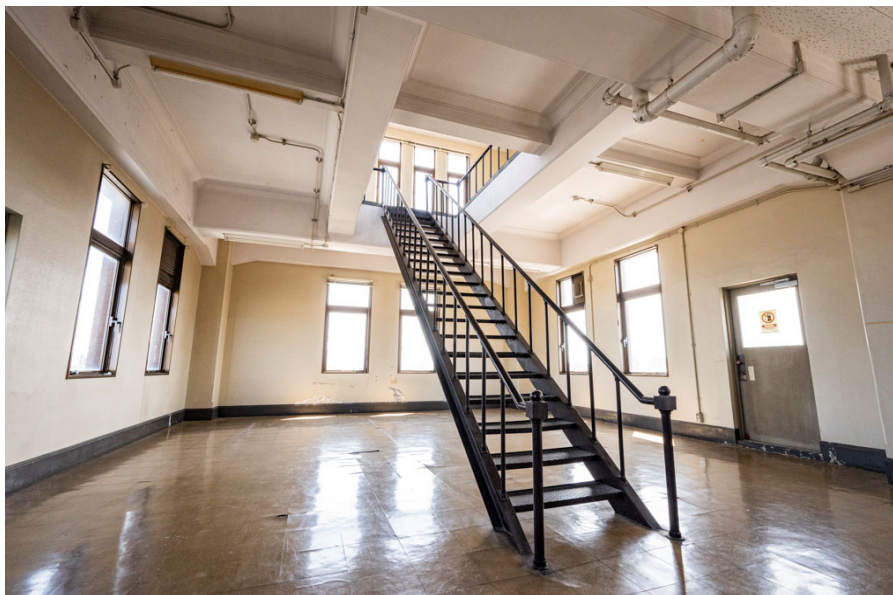
工学部本館
4F会議室 壁面絵画

会議室の壁を彩る油絵は、帝展で最高賞を得た青山熊治（あおやまくまじ）の未完の遺作。工学部の専門領域につながる五行説の「木、火、土、金、水」に基づく要素が描かれているとされる。数少ない戦前の大学壁画の作例であり、戦争や大学紛争の被害から逃れて現存する貴重なものである。



工学部本館 4F会議室 北側半円部

半円状の造作椅子の蹴込み板には暖房が設置される等の工夫が凝らされている。



工学部本館 塔屋階段

屋上へ続く塔屋の鉄製階段。手摺はこの時期には珍しく部材を溶接して製作されている。



工学部本館 地下ピット

地下ピットでは建設当時の基礎の部分を確認することができる。



本部事務室棟 正面外観（西）

正面中央西側に玄関、南北に均等に棟を配し、その端部には東西に翼を設ける。2階南側と1階は主に職員事務室として使用されてきた。南北端部には階段と通用口を設ける。



本部事務室棟 正面南翼 窓周り・空気抜き

煉瓦造の赤い壁に窓台、アーチのキーストーン、木製格子が嵌められ石にレリーフを施した床下空気抜きを設ける。



本部事務室棟 北側通用口上部

所々に過剰・時代錯誤的と思える石造の意匠が見られるが、これは1914(大正3)年に建設されのちに火事で焼失した旧工科大学本館の旧観を復すよう部材を転用して作られたためと思われる。



**本部事務室棟
正面中央塔屋**

全体的に装飾的要素が少ないながらも、中央部塔屋の三分割されたルネット窓と2階上部の幅広いバンドコースに洒脱さを感じられる。



**本部事務室棟
正面玄関ポーチ**

玄関ポーチにはエンタシス風に孕んだ花崗岩の角柱が並ぶ。



**本部事務室棟
正面玄関ポーチ車寄せ**

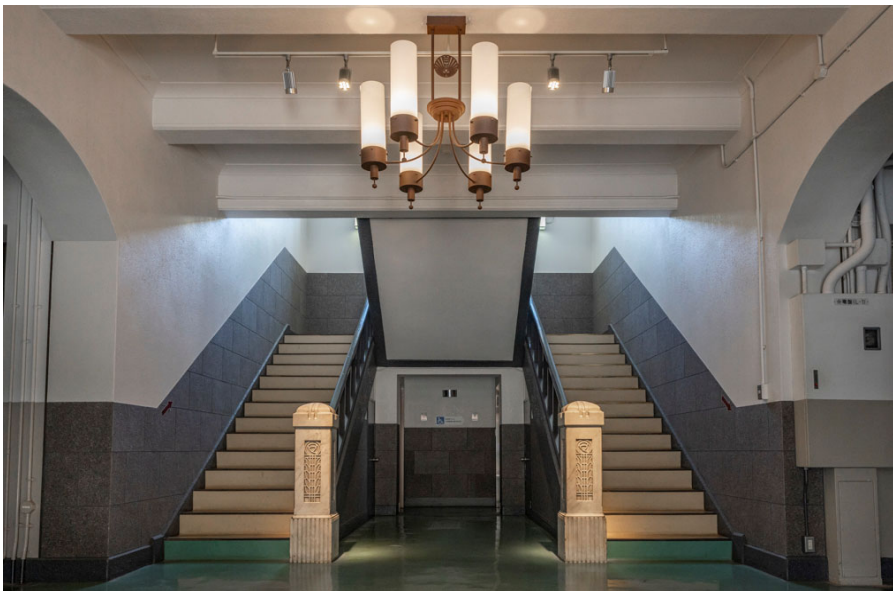
玄関前に設けられた車寄せは、場所によって人造石、花崗岩、ブロック等を分けて使用されている。礎石飾りの白い石細工が適度なアクセントを与えている。



本部事務室棟 寄付銘板

玄関には古河財閥の寄付行為を表彰した銘板が掲げられている。

上段が福岡工科大学設置時のもの、下段が工科大学本館焼失後の二度目の寄付に対するもの。



本部事務室棟 中央階段

玄関入り正面に踊り場付両折り返し階段を設け、大きな吹抜け空間が広がる。



本部事務室棟 中央階段親柱

中央階段の親柱にはセセッション風の彫刻を施す。当初図面によると中央階段の手摺りに親柱と同じ花モチーフの装飾が施されていたが、改修過程で装飾のない木手摺へ変更されている。この花モチーフは焼失した工科大学本館においても、その玄関ポーチの庇や柱頭などの装飾に使用されていた。



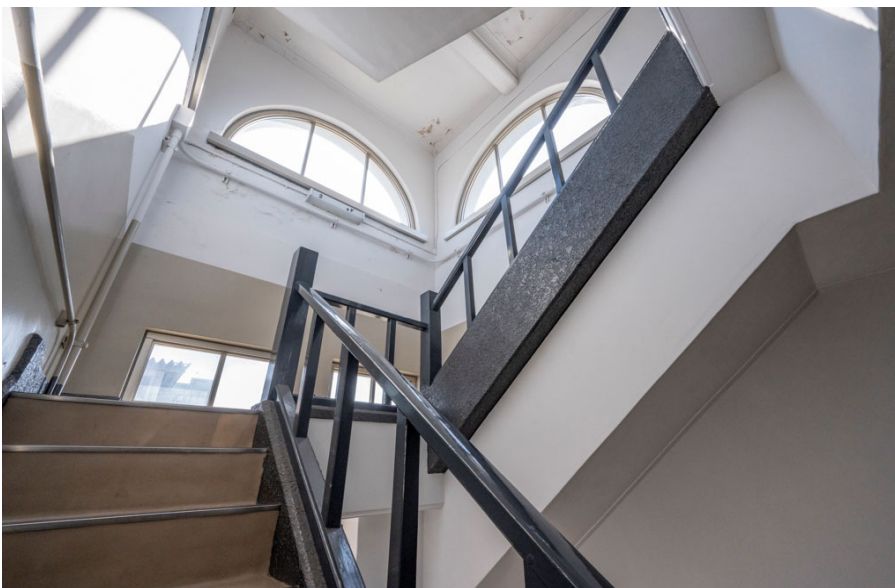
**本部事務室棟
2F 特別応接室 正面扉**

中央階段を昇り正面に位置する特別応接室。扉は1968(昭和43)年の改修である。北側(写真右手)のステンドグラス付きの扉を開くと、赤い絨毯敷の回廊の先に役員室が並ぶ。2F通路扉のステンドグラスや階段吹抜部分の照明など、のちに改修された部分も意匠に凝ったものが多い。



**本部事務室棟
2F 特別応接室**

圧巻の豪華さを誇る特別応接室。壁紙や照明が1968(昭和43)年に改修される以前は、天井は漆喰塗でもっと高さのあるものであった。



**本部事務室棟
南側階段吹抜**

塔屋の三方を特徴的なルネット窓が囲む。

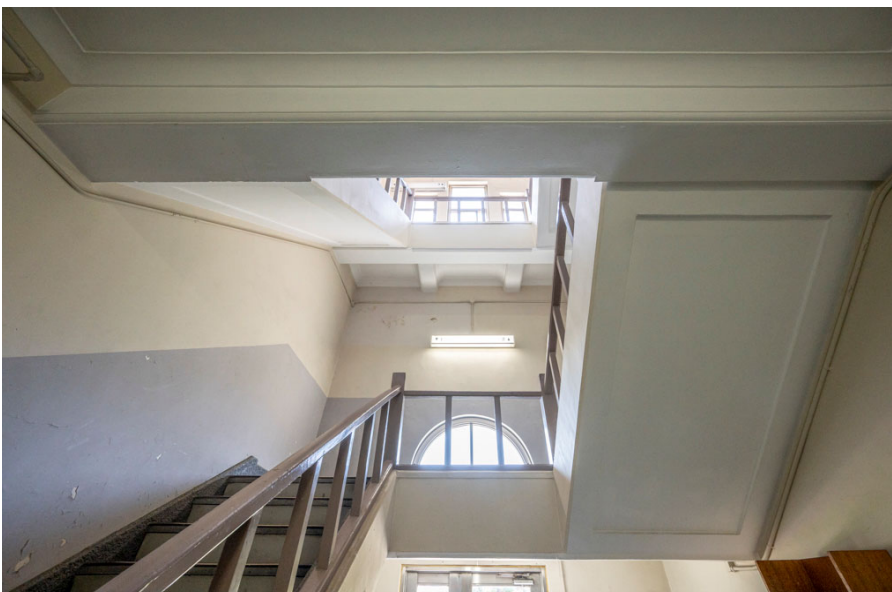


本部建築課棟
正面外観（西）

1階窓をセグメンタルアーチ、
2階窓を角形の縦長窓で整然と
並べ、これらのデザインは隣に
並ぶ本部事務室棟と揃えてあり
一体感がある。雨樋など管類も
煉瓦に合わせた赤色で塗られて
いる。正面玄関上や半地下の半
円窓は、大正後期に隆盛した表
現派の影響を受けているとも言
える。



本部建築課棟半地下窓（南）



本部建築課棟階段吹抜



門衛所 外観（西）

東西の棟には半円と直線が組合せられた金属製棟飾りを有し、正面以外の4か所に半円状のドーマーを配する。ドーマーのうち東側の二つのみ木製ガラリが残されている。



門衛所 玄関上破風

玄関上のブローケンペディメント(※)に意匠が集中しており、人造石に幾何学的な模様が施され、その中央に木製ガラリを嵌めたルネット窓が存在する。

※…西洋建築における一部欠けた切妻屋根の妻側屋根下部と水平材に囲まれた三角形の部分。日本建築の「破風」に該当。



門衛所 東側窓キーストーン

曳家により建物の向きが変わったため、道路や民家に向けた側の外壁により高い装飾性が認められる。窓枠は建設当初の木枠が一部残存する。



正門（東）

正門は赤煉瓦と石造の組み合わせである門柱・脇柱で構成されており、赤煉瓦の門柱・脇柱は、白御影石の礎石上に立ち、同じく同じく白御影石の笠木を頂く。



正門門柱（上部）

門柱の上部には、白御影石の笠木が設置されている、笠木下部にはフリース状の飾りが付き、その上にコーニス状に迫り出した削形がある。平らな台座の上には照明器具が据えられている。



塀（柵柱）

塀は、柵柱及び上部に柵を有する組積造で構成されている。白御影石の礎石上にコンクリートブロックを組積し白御影石の笠木が設置された下部構造の上に赤煉瓦の柱、白御影石の笠木及び柵で構成されている。写真の柵柱は120° 屈折しており、当時の技術力の高さを感ずることができる。